

古代アメリカ学会第17回研究大会発表要旨

- 調査速報の部 -

「ペルー中央高地アヤクーチョ谷、タンタ・オルホ遺跡出土の形成期の土器」

土井正樹(京都文教大学非常勤講師)

先行研究により、ペルー中央高地のアヤクーチョ谷には、中央アンデス地域の編年上、形成期に位置づけることができる遺跡が複数存在していることが確認されている。しかし、ペルー北部の海岸部および高地における形成期遺跡の調査数の多さと比較すると、アヤクーチョ谷の形成期遺跡に関する調査は少なく、それらに関する資料も限られている。そのため、中央アンデス地域の形成期研究の進展にとって、アヤクーチョ谷の形成期遺跡に関する資料を増やすことが欠かせない。そこで本発表では、アヤクーチョ谷の形成期に関する新たな資料として、アヤクーチョ谷のタンタ・オルホ遺跡から出土した形成期の土器について報告する。

タンタ・オルホ遺跡は、ペルー中央高地南部に位置するアヤクーチョ谷の、トリゴパンパ村に位置する。発表者はこの遺跡を対象とし、2001年に踏査を、2002年に発掘調査を行った。とくに、2002年の発掘調査では、地方発展期および地方王国期に関する考古資料に加え、形成期の土器資料を得ることができた。しかしこの調査の目的は、紀元後700年頃から1000年頃にかけて、アヤクーチョ谷を中心に栄えていたと考えられているワリ国家に関する資料を入手することにあつた。そのため、形成期の資料に関してはあまり分析を進めてこなかった。

しかしながら、上述したようにアヤクーチョ谷の形成期に関わる資料が少ない現状では、タンタ・オルホ遺跡出土の形成期の土器は貴重な資料であるといえる。そこで本発表では、タンタ・オルホ遺跡から出土した形成期の土器の特徴について報告する。まず、タンタ・オルホ遺跡の概要を説明し、続いて、形成期土器の出土状況について述べる。次に、タンタ・オルホ遺跡の形成期土器の装飾や器形について説明する。最後に、タンタ・オルホ遺跡の形成期土器と他の遺跡から出土している形成期土器との比較を行う。

「形成期、パコパンパ遺跡における冶金—銅製錬および金製錬と銅製品・金製品の製作—」

荒田 恵(国立民族学博物館外来研究員)

清水 正明(富山大学)

中島 真美(富山大学)

清水 マリナ(富山大学)

パコパンパ遺跡は、ペルー北部高地に位置する形成期の祭祀遺跡である。2005年より、日本調査団と遺跡を所有する国立サン・マルコス大学が合同で調査を行っており、2007年より出土遺物の分析を並行して行っている。2010年度および2011年度の分析で、パコパンパ遺跡より銅製錬を示唆する銅の鉱滓、銅製錬産物である酸化銅および粗銅が出土していることが確認された。これらの成果に加え、今年度の分析で、台石(アンビル・ストーン)に分類している石器に酸化銅が、また土製小容器に金粒が付着していることが明らかになり、パコパンパ遺跡において銅および金の製錬が行われていた見通しが得られた。

銅製錬および金製錬の開始時期に関しては、酸化銅が付着している台石がパコパンパ I 期(B.C.1200-B.C.800)の後半に相当する層から、土製小容器がパコパンパ II 期(B.C.800-B.C.500)に相当する層から出土していることが確認されているため、銅製錬はパコパンパ I 期後半以降、金製錬

はパコパンパ II 期以降に開始されたと考えられる。特に銅製品の製作に関しては、C 区から出土する資料の分析で、パコパンパ II 期初めに骨製針から銅製針へ移行し II 期後半で出土量が逆転することが確認されていることから、II 期後半には銅製針あるいは銅製品を大量に生産することができるようになっていたと推定できる。

銅の精錬方法に関しては、富山大学理学部の清水正明、中島真美、および清水マリナによって実験的研究が行われている。具体的な製錬方法はまだ明らかになっていないが、彼らの研究によって、パコパンパ遺跡では 1083°C 以上の温度で銅製錬が行われていたことが明らかになっている。この温度ならば金や銀の精錬も可能であり、これらの技術革新が一連のものであったと想定される。

冶金を行った製作址に関しては残念ながらまだ確認されておらず、今後の発掘調査の進展に期待するしかない。

「ペルー北部高地パコパンパ遺跡における偶蹄類利用」

鵜澤和宏(東亜大学)

関雄二(国立民族学博物館)

マウロ・オールドーニェス(ペルー国立サン・マルコス大学)

ディアナ・アレマン(ペルー国立サン・マルコス大学)

フアン・パブロ・ビジャヌエバ(ペルー国立サン・マルコス大学)

古代アンデスでは、紀元前 4000 年以降、シカやグアナコを対象とする狩猟が衰退し、2 種のラクダ科家畜の飼育に置きかわっていく。なぜ人々は狩猟をやめ、家畜飼育を始めたのだろうか？ 一般に、狩猟採集から農耕・牧畜へと転換する「生産革命」の発生要因は、西南アジアにおける考古学調査にもとづき検討されてきた。現在も問題が解明されたわけではないが、「技術革新」「気候変動」「人口圧による衰滅拡大」の 3 要素を重視する説が広く受け入れられている。

ただし、南米大陸における農耕と牧畜はアフロ・ユーラシア大陸とは独立に生じており、西南アジアにおける生産革命の発生要因モデルが適用できるかは検討を要する。

発表者らは、ペルー北部高地に所在する形成期神殿の発掘調査によって得られた動物骨資料の分析から、形成期中期から後期にかけて、ラクダ科家畜飼育が開始されたことを明らかにしてきた。2007 年に着手し、5 シーズン目をむかえたパコパンパ遺跡(カハマルカ県)における動物考古学調査では、動物骨を出土する層序の所属年代が明確になってきたことにより、研究の進展をみている。特に、今シーズンはこれまで資料の乏しかったパコパンパ I 期(形成期中期)の資料が充実し、ラクダ科家畜を受容する過程をより詳細に検討できるようになった。動物利用の変遷を実証的に検討できるようになった。

本発表では、これまでにあきらかになったパコパンパ遺跡における動物利用のうち、とくに大型は乳類の利用に焦点をしばり、シカ狩猟が衰退し、ラクダ科家畜の飼育が導入される過程について報告する。

「ペルー北高地パコパンパ遺跡における金製品を副葬した墓の発見」

関 雄二(国立民族学博物館)

フアン・パブロ・ビジャヌエバ(ペルー国立サン・マルコス大学)

本発表では、ペルー北高地パコパンパ遺跡において、国立民族学博物館・ペルー国立サン・マルコス大学合同調査団が本年 9 月に発見した金製品を副葬した墓について概要を報告するとともに、被葬者の社会的地位について考察する。既述の墓が発見されたのは、パコパンパ遺跡第 3 基壇に位置する北基壇内であり、編年上、第 II 期(B.C.800~B.C.500 補正後)の初期にあたる。北基壇は、一辺が 30m の半地下式広場の北に位置し、広場の西に位置する中央基壇、南に位置する南基壇とともに、いわゆる U 字形の配置を示す建築群の一翼を担う。墓は 80cm×90cm の楕円の形状を呈し、深さ約 25cm の浅い土壇墓であるが、後の建築活動によって上部が破壊された可能性が高い。被葬者の性

別は、自然人類学的分析を待たねばならぬが、攪乱や二次埋葬を想起させる痕跡は認められず、また辰砂(朱)も認められない。黒色鏡形(あぶみがた)土器 1 点および圈点文(けんてんもん)が施された黒色の鉢形土器 1 点が副葬されていたほか、珪孔雀石製の小型管玉 1 点と金環(金製の輪)が 1 点出土した。金環の直径は 2cm であり、下顎直下から発見されたため、首飾りの一部であった可能性が高い。アンデス文明初期の社会は、一般に比較的平等的な社会と考えられてきたが、近年の研究では形成期後期には、宗教的指導者が権力を掌握し始めたことが提示されている。パコパンパ遺跡で 2009 年において発見された「パコパンパの貴婦人」墓もその証拠の一つである。しかしながら、「パコパンパの貴婦人」墓は、II 期における神殿建設の途上において設けられた埋葬であり、神聖な空間に宗教的な力を埋め込む儀礼的行為と解釈された。すなわち神殿建設後の活動におけるリーダーとその権力の存在については未解明の状況にあった。今回の墓の発見は、神殿建設後、この空間を利用した人々や社会の間で、社会的地位の差異が存在したことを示唆するものである。

「アステカ王国史における自然災害の神話的解釈」

井関 睦美(明治大学)

アステカ王国(1428～1521 年)は、テツココ湖上の小島を埋め立てて建造された都市国家テノチティランを拠点として、広くメソアメリカに影響を及ぼした。テツココ湖が位置する標高 2,000m を超えるメキシコ盆地は、気候変動の影響を受けやすい環境にある。文献史料や考古史料からは、アステカ王国が度重なる自然災害の経験から、都市環境を整備し、戦略的に支配領域を拡大していった過程を観察できる。

アステカ王国は、大災害に直面した際、技術革新や政治・経済的復興対策だけではなく、精神面でも適応力を発揮することで、さらなる社会発展を実現した。1440 年代後半から数年間続いた気候変動とそれに伴う大飢饉では、テノチティランの第 5 代王モテクソマ 1 世(1440-1469 年)は、洪水対策として湖を縦断する堤防の建造を命じ、安定的な真水の確保のために水道橋の改造も行った。その後王国は、湖周辺の耕作地の拡大、メキシコ湾岸地域など旱魃の影響の少ない豊かな地域への侵攻、および遠距離交換網の拡充に注力し、その支配領域を拡大した。一方で同王は、災害直後に開催した 52 年周期の大規模儀礼「年を束ねる儀礼」を再編することで、災害経験を神話的文脈のなかに昇華させ、循環的時間観念に基づく民族史の一部として取り込んだ。伝統的な暦のリセット儀礼であった「年を束ねる儀礼」に、アステカの戦闘的な太陽信仰を重複させることで、戦争や太陽神への生贄を正当化し、政治・宗教的主導力を示す機会としても利用した。

その 52 年後、第 9 代王モテクソマ 2 世(1502-1520 年)の治世も、大飢饉に見舞われると同時に「年を束ねる儀礼」を催行する時期に当たっていた。本発表では、すでに周期的事象のセットとして認識されていた大災害と大規模儀礼の思想背景を表現している、モテクソマ 2 世時代の 3 点の石像彫刻の分析から、災害の神話的解釈の機能と意味を考察する。

「エル・サルバドル共和国チャルチュアパ遺跡における地下レーダー調査」

伊藤伸幸(名古屋大学)

柴田潮音(エル・サルバドル文化庁考古課)

今回の調査は、2012 年 3 月に、同遺跡カサ・ブランカ地区とエル・トラピチェ地区で三菱財団助成金を得て、(株)田中地質コンサルタントの協力により実施した。また、目的は地下レーダーを使って、石彫の存在の有無やその配置を解明することである。器材は、NOGGIN250plus Smart Cart を使用した。

先古典期中期における石彫文化はオルメカ文化に代表されるように、石彫が整然と計画され配置されていた。また、先古典期後期は、メキシコのチアパス州からグアテマラそしてエル・サルバドルまでの太平洋岸から高知に至る地域では、イサパ-カミナルフユ様式の石彫文化が栄えていた。この石彫文

化を代表するイサパやタカリク・アバフ遺跡では建造物に関連して石彫が整然と並んでいた。こうした石彫文化のメソアメリカ南東端での様相をチャルチュアパ遺跡で明らかにすることとした。

チャルチュアパ遺跡では、先古典期中期から後古典期までの石彫が出土している。今回は先古典期中期～後期の石彫文化を明らかにするために、カサ・ブランカ地区で先古典期後期の石彫文化を、エル・トラピチェ地区で先古典期中期の石彫文化を調査することとした。カサ・ブランカ地区の今までの調査では、素面の石碑や丸彫りの石彫が建造物の近くから出土しており、エル・トラピチェ地区では、地区最大の建造物の中心軸上に並んで出土していた。建造物と石彫の関係が密接であることが明らかである。建造物周辺の低い部分において、地下レーダー探査をすることにより、石彫の存在の可能性を探ることとした。

今回は、この地下レーダー探査の調査結果を発表する。また、過去の考古学調査成果と比較し、その意味を検討する。

「マヤ北部低地における石彫マスクの調査速報」

多々良 穰(東北学院榴ヶ岡高等学校)

発表者は、2012年8月にメキシコのユカタン半島北部の遺跡をまわり、建造物に装飾されたモザイク石彫、特に石彫マスクについて調査・写真撮影を行った。石彫マスクが確認できた遺跡は12か所(アカンケー、マヤパン、チチェン・イツァ、ウシュマル、カバー、ラブナー、サイル、シュラパック、エズナ、オチョブ、ジビルノカック、タバスケーニョ)であった。それらのマスクが何を表象したものであるか、現時点での分析を報告する。

古典期後期から終末期(8～10世紀)に造られたマヤ北部低地の建造物に見られる「長いカギ鼻を持つ石彫マスク」は、1990年頃まで雨の神「チャーク」と考えられていた。しかし近年、マヤ文字の解読により山の怪物「ウィッツ」だと解釈されている。

コパン遺跡の建造物22に見られる「長いカギ鼻を持つ石彫マスク」は、スチュアートによる文字解読の研究成果から、山の怪物「ウィッツ」であると提唱された。その影響で、ウシュマルやチチェン・イツァ、カバーをはじめとする遺跡の石彫マスクも、「ウィッツ」に同定される傾向が強い。

しかし、少なくともユカタン半島の遺跡における「ウィッツ」説の根拠は、図像学に基づくものであり、マヤ文字解読によるものではない。しかも、ユカタン半島で遺跡に精通している人々も、いまだに「長いカギ鼻を持つ石彫マスク」が「チャーク」であると認識している。また、オチョブ、ジビルノカック、タバスケーニョなどのチェネス様式の遺跡では、「チャーク」を表象した可能性が高い石彫マスクを確認できた。その理由の一つは、石灰岩質の土地に豊富に存在するセノーテやチュルトウンの存在である。マヤ人の世界観が、当時の生活環境に大きく影響されていたことも考慮すると、雨水の存在は非常に重要である。発表者が撮影した具体的な写真を通し、「チャーク」と考えられる石彫マスクの存在を報告するとともに、同じ建造物で「チャーク」と「ウィッツ」が同時に装飾されていた可能性も指摘したい。

「マヤ文明世界遺産の遺跡マネジメントー金沢大学のティカル計画紹介ー」

中村誠一(金沢大学)

我々が過去の社会や文化を明らかにする目的で学術的な調査研究対象とするマヤ文明の遺跡は、その遺跡が存在する国の国民、その遺跡の周辺に住む人々、その遺跡の管理運営に実際に携わっている人々によって、それぞれ我々とはまったく異なった関心や視点からとらえられている。異なった関心や視点から相互に利害関係が生じ始めると、時には、観光客の押し寄せる世界遺産の遺跡公園がもつ経済的な価値をめぐって、その世界遺産を管理運営する政府機関と地元の人々との間に抜き差しならぬ対立関係が生じてしまいマスコミを巻き込んでの政争が繰り広げられることもある。またマヤ文明の世界遺産と一口にいっても、その様態は多様であり、世界遺産と地元住民の関わり方、世界遺産の調査研究法や維持管理運営の仕方には大きな差がある。

金沢大学は全学の重点研究分野の一つとして世界遺産の遺跡マネジメント分野を選定し、研究拠点形成事業を展開しており、その中心的な事業対象としてグアテマラのティカル遺跡などマヤ文明の世界遺産を選定した。ティカルは最盛期である古典期マヤ文明を最も象徴する都市遺跡の一つであり、マヤ文明の代名詞であると同時に地域唯一の世界複合遺産でもある。1956年～1969年にペンシルバニア大学によって行われた「ティカルプロジェクト」は学術的にマヤ文明研究の標準を作り、修復された大規模な神殿ピラミッドは、ティカルを文化観光地として世界に知らしめることに成功したが、同時に遺跡マネジメント分野での難しい課題も後世の我々に残すことになった。この発表では、世界遺産の保護と後世への継承という視点と世界遺産の活用を通じた経済開発という視点の接点として機能する「文化資源」という考え方に沿って、国際文化資源学研究会がマヤ地域で展開しているこうした学術的な研究調査の現状と展望に関して本学会員に紹介するものである。

- 研究発表の部 -

「形成期における地域間交流と社会変化:ペルー北部ワンカバンバ川流域を事例として

山本睦(埼玉大学非常勤講師)

本発表は、ペルー北部ワンカバンバ川流域を事例に、形成期(紀元前 3000-50年)における地域間交流と同流域の社会変化との相互関係について論じるものである。

発表者らは 2005 年よりワンカバンバ川流域において遺跡分布調査、および同流域で最大規模の神殿遺跡インガタンボで発掘調査を実施してきた。そしてこれまでに、ワンカバンバ期(紀元前 2500-1200年)、ポマワカ期(紀元前 1200-800年)、インガタンボ期(紀元前 800-550年)と冠せられた 3 時期の存在を確認した。

これまでの調査の結果、インガタンボ神殿において執り行われる建設活動や儀礼といった諸活動は、成員の紐帯を図り、社会を維持するためのものから、集団内の社会的差異を認識させて不平等を覆い隠し、その関係を正統化する契機や手段へと、次第に(ポマワカ期以降)変化していった可能性が示された。

こうした変化に際して重要な作用をおよぼしたのが、地域間交流である。なぜならば、インガタンボでは、ポマワカ期に入って地域間交流を示すデータが顕著に現れるようになり、それとともに神殿における諸活動(建設活動や製作)が活発化するためである。これは、神殿における諸活動を実施し、集団内の社会的差異を維持、顕在化するうえで、外在の知識や物資、あるいはその製作技術へのアクセス手段として、地域間交流が重要であったためであると考えられる。また、遺跡分布データに目を向けると、ポマワカ期に入ると突如として流域内に周辺地域の諸特徴を有した複数の神殿が建設されるだけでなく、神殿と居住域、あるいは耕作地といった空間分化が生じる可能性さえも示唆された。このようにして、ワンカバンバ川流域では、周辺地域(ペルー北部とエクアドル南部)における地域間交流網に組み込まれるとともに、急激な社会変化が生じることから、地域間交流と社会変化の相関関係が指摘できるのである。

この地域間交流のあり方を大きく変えたのが、ラクダ科動物の利用とそれによる地域間ルートの変化である。これは、神殿の立地にも如実に反映されており、ポマワカ期に建設された神殿は、流域から周辺地域に抜けるルート上に位置している。とりわけ、東西南北の各方向に抜けるルートの結節点に位置するインガタンボは、地域間交流における要衝となり、成員がその状況を積極的に利用することで、徐々に流域内の社会統合の核としての立場を確立していった。これは、地域間交流を通じた物資や情報の獲得・利用が、流域社会へ与えた重要性を強調するものである。

ただし、こうしたインガタンボや流域社会の特性、あるいは地域間交流とその社会的、政治的、経済的役割は、周辺地域社会との関係性のなかで、状況に応じて時期ごとに変化した。インガタンボは、常にペルー北部における地域間交流における重要地であったものの、ポマワカ期、そしてインガタンボ

期と地域間交流が質的に変化するに従い、周辺地域社会の動向に応じて、その社会的位置づけを主体的に変化させたのである。

「アンデス縦断の視点からの形成期セトルメント試論」

鶴見英成(東京大学総合研究博物館)

研究の目的と方法

アンデス文明形成期の社会過程の特徴として、定住村落の中核として機能した神殿建築の更新活動と、社会・経済・技術の発展とがポジティブ・フィードバックの関係にあった、という点が指摘されている。しかし、神殿がその地点に成立した背景については議論の余地がある。神殿の成立の背景は、その後神殿が維持され、またある時点で放棄された理由とも密接であり、形成期の社会過程を正しく理解するために重要な研究課題であろう。個々の神殿遺跡に関し、水利・資源・儀礼的景観・地域間ルートなどの視点からその立地を論じた研究事例はあるが、本研究はとくに地域間ルートに焦点を当てる。アンデス山脈西斜面のセトルメント研究においては、東西方向に延びる海岸河谷を単位として分析するのが通例であった。しかし発表者は山間部を越える河谷間ルートに着眼し、南北方向に縦断する視点から新たな説明を試みる。主対象は神殿遺跡の稠密なペルー北部海岸・山地である。

形成期のルート研究は GIS(地理情報システム)を援用した議論が始まりつつあるが、本研究は踏査によるフィールドデータと先行研究をもとに、帰納的に遺跡間のつながりを浮かび上がらせる方法を採用する。また従来の神殿・定住村落研究において等閑視されてきた岩絵を、ルートの経由地を示すデータとして重視する。このように作業仮説としてルートを復元しつつ、そこから形成期セトルメントの動態を考察する。

本研究は集積されたデータ全体の蓋然性に依存しており、終わりなきデータ収集と理論的裏付けを要する。試論の段階ではあるが、現時点での見通しを提示して批判を仰ぎたい。

南北方向の主要ルートの経路とその背景

神殿の成立以前、パイハン文化に始まる狩猟採集伝統においては、海岸から山地に至るまで縦横無尽に資源が利用された。その時点での山間部通行に明確なルートがあったとは想定できない。しかし神殿・定住村落の成立と前後して、複数の河谷を結ぶような長距離ルートの経路が限定されたことが、データの集積による帰納的な復元から見て取れる。現時点での見通しでは、もっとも古くから重点的に利用されたのがサンティアゴ・デ・チューコ高地を経由するルートであり、形成期早期の神殿、美術、および最初期の土器がその線上に分布する(各河谷の沿岸部に大規模な神殿建築が存在したのは、海上交通を想定すべきかもしれない)。ついで形成期前期から中期にかけて、サンティアゴ・デ・チューコ高地に到達しないモチェ・ビルー・チャオの各河谷の中流域に神殿遺跡が登場するが、それらの立地は中流域を縦断するルートと密接である。一般に地域間ルートは神殿に先行するか、もしくは少なくとも同時に成立したと考えられる。たとえば形成期後期のバト峡谷北岸では、既存のルート上に神殿が多数連なる状況が生まれるが、その区間の交通の重要性・頻度の高まりと関係すると考えられる。

山間部通行の経路は本来自由に選べるはずであるが、形成期における人と物資の長距離移動は、中央高地北部に始まるラクダ科動物飼育・荷駄利用と密接であったため、飼育環境(海岸部ロマスの分布など)、安全性(峡谷の回避など)といった側面から経路が規定されたのではないか。さらに牧畜の拠点がサンティアゴ・デ・チューコ高地、カハマルカ高地へと通時的に北進するにつれ、荷駄獣の供給元は変遷し、ルートの区間ごとの利用頻度が変化し、それが神殿の成立や衰退に影響を及ぼした、という仮説の検証が長期的課題である。

「ペルー、カンパナユック・ルミ遺跡における神殿の再利用に関する考察」

松本雄一(国立民族学博物館)

ユリ・カペロ＝パロミーノ(ペルー国立サン・クリストバル・デ・ワマンガ大学)

エディソン・メンドーサ(ペルー国立サン・クリストバル・デ・ワマンガ大学)

発表者は、2007年から2008年にかけてペルー中央高地南部、アヤクーチョ県ビルカスワマン郡に位置するカンパナユック・ルミ遺跡において発掘調査を行った。同遺跡は形成期中期・後期(紀元前1100-500年)に対応する神殿遺跡であったが、長い空白期間を経て後期中間期(紀元1000-1400年)に再びチャンカ文化によって建築が再利用されるようになった。発表者の調査によって、特殊な再利用のコンテキストが二つ確認されている。

一つは、形成期神殿の主要なアクセスである中央基壇の階段を掘り起し、壁面に円形の構造物を付け加えた部分である。これらのいくつかは灰で覆われており、その内側からは動物をかたどった土製のミニチュアなどが発見された。おそらくは奉納遺構であろうと考えられる。もう一つは埋葬であり、形成期神殿の基壇の上から大量の人骨が発見された。不規則な骨の配置、欠損した部位などから考えて、どこか別の場所で埋葬されていたものが持ち込まれた二次埋葬であろうと考えられる。また埋葬の上には灰層が位置しており、半完形土器と動物のミニチュアが多く出土した。このようなデータは、二次埋葬に際して、儀礼的な饗宴が行われた可能性を示している。

また、形成期において神殿として用いられていた部分には、近隣の遺跡で数多く見られるようなチャンカ文化の円形住居址は全く確認されていない。さらにカンパナユック・ルミ遺跡は、ビルカスワマン周囲の山上に見られるような、ある種防衛的な集落とは建築においても立地においても共通点を見出すことができない。このような状況から考えて、形成期の神殿であるカンパナユック・ルミは後期中間期において儀礼を行うための空間として再利用されたと考えられる。エスノヒストリーのデータによれば、インカがビルカスワマンにおいてチャンカ族に勝利した際、悪く醜いワカを打ち倒したという記述が存在しており、カンパナユック・ルミがチャンカ文化のワカの一つであった可能性が示唆される。

「シュモッコ政体の社会政治構造: 土器胎土分析にもとづく先スペイン期ティティカカ湖盆地南西岸史の考察」

佐藤吉文(国立民族学博物館・外来研究員)

本発表では、発表者が実施した土器の胎土分析にもとづいて、先スペイン期ティティカカ湖盆地南西岸のパレルモ遺跡を中心とした地域におけるティワナク期(A.D.500-1150)前後の社会政治構造を実証的に論じる。

ここ20年ほどの考古学調査によって、紀元600年ごろまでに国家段階の政治機構を整えたとされるティワナクがティティカカ湖盆地各地にもたらしたさまざまな影響は、それぞれの地域の社会政治的状况によって異なるかたちで現われたことが知られている。しかしながら、セトルメント・システムの分析を除けば、それを方向づけた形成期の社会政治構造とティワナク期以後の変化を地域レベルで実証的かつ具体的に論じた研究は少ない。それは詳細な遺跡間比較を可能にする発掘調査がまれなためである。

発表者が発掘調査を実施してきたパレルモ遺跡は、先土器期末期(3500-2000B.C.)からインカ期(A.D.1450-1532)まで断続的に利用された複合遺跡である。従来の研究では、形成期後期(400B.C.-A.D.500年)からティワナク期には半地下式広場を整え、その祭祀的性格を強めて周辺地域を社会的に統合する役割を果たしたと考えられてきた。その政治的なまとまりが「シュモッコ政体」である。当該地域において実施された遺跡分布調査ではその地理的範囲は必ずしも明確ではないが、セトルメント・システムの分析では、この地域に概ね三つの遺跡規模階層が認め得ることから、首長制段階の社会のなかでも比較的複雑な社会政治構造を有していたと想定されてきた。しかしながら、その一部をな

し、「社会的エリート」とも関連づけられるトゥマトゥマニ遺跡やシヌモッコ・ハキナ遺跡とパレルモ遺跡が具体的にどのような関係にあったのかは明らかではない。

しかし、発表者が今夏実施したパレルモ遺跡出土土器資料 6,402 点の胎土分析は、シヌモッコ政体をそれらの遺跡を形成したひとびとの具体的な行為にもとづいて論じるうえで契機となる。発表者は、すくなくとも形成期後期からティワナク期にかけてのパレルモ遺跡出土土器が 20 種類以上の胎土から作られていることを確認した。本発表では、胎土を基準として出土土器の構成を定量的に示してその特徴を論じるとともに、香炉など祭祀性の高い土器に注目して胎土と器形の相関関係について定性的な予察を加える。さらに、直線距離で 3km 北東に位置するトゥマトゥマニ遺跡における胎土別土器構成と比較して遺跡間での差異について検討する。そのうえで、形成期後期 I 期のティティカカ湖南岸のタラコ半島で認められた近隣三遺跡間の胎土構成比較を参照して、その遺跡間関係の普遍性を検討する。最後に、このような手続きを踏まえて得られる遺跡間関係を既存のセトルメント・システム研究の成果ならびに発表者によるパレルモ遺跡の発掘調査結果に総合して、「シヌモッコ政体」の社会政治的構造とその特徴について論じる。

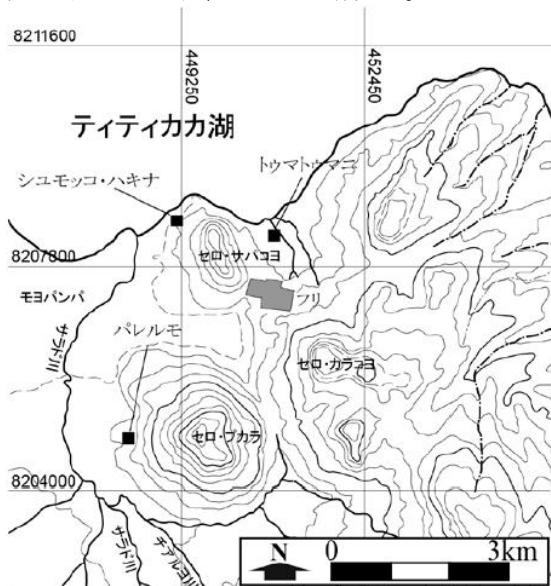


図 1：パレルモ遺跡とその周辺

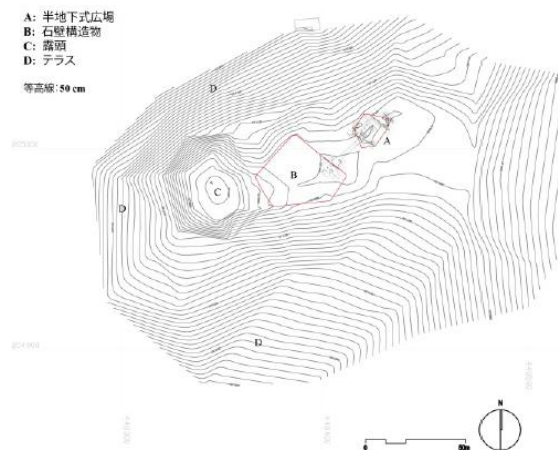


図 2：パレルモ遺跡地形図

「ワリ帝国における地方支配—ペルー北部高地、エル・パラシオ遺跡の発掘調査」

渡部森哉 (南山大学)

しばしばインカ帝国の祖型と見なされるワリ帝国 (後 600-1000 年) について、近年新たなデータが蓄積されつつある。クスコ県エスピトゥ・パンパ遺跡で 2010 年に発見されたワリ文化の墓などがその一例である。本発表ではペルー北部高地カハマルカ県に位置するワリ帝国の行政センター、エル・パラシオ遺跡における 3 回にわたる発掘調査のデータを基に、同帝国の地方支配、政治組織、政治と文化の関係について考察する。

しばしば、帝国という言葉から、文化的統一性が想定される場合がある。しかし、帝国という政治組織の特徴の 1 つは、民族的文化的多様性である。例えばインカ帝国においては、支配者集団であるインカは、他の民族集団と自らを識別し、頭飾りや耳飾りによって、その際を明示した。しかも民族集団の枠組み自体も、インカの支配下によって操作され、分断統合されたと考えられる。

政治的統一性と文化的多様性を帝国の特徴とするならば、ワリも帝国という名称で呼ぶことが適当である。インカ帝国では、いわゆるインカ様式の遺物・遺構の分布は、地域によってばらつきがある。カハマルカ地方においては、タンブと呼ばれる行政センターがあり、インカ道が現在でも遺構として確認できる。ところがそれ以外には、インカの存在を示す証拠を見つけることは難しい。そもそもタンブとは、恒常的に人間集団が生活する場ではなく、各地の人間集団をコントロールするための装置であった。それは人々を集めて労働をコントロールし、生産された物資を管理し、そして人々を集めて儀礼を行う場であった。こうした行政センターが存在すれば、その周囲の地域の人々が、インカ帝国の支配下にあったと想定することができる。

このようなインカ帝国とのアナロジーを用い、ワリの場合にも行政センターがあれば、その地域が支配下にあったと想定したい。カハマルカ地方においては、以前ワリの明確な証拠が確認されていなかったが、2008年に開始したエル・パラシオ遺跡の発掘調査により、同遺跡が50～100ヘクタールある大遺跡であり、建築、埋葬形態の特徴、遺物の出土パターンなどから、ワリ帝国の行政センターであることが明らかとなった。幅140cmまである厚い壁が直交し、アクセスがコントロールされた建築様式は、明らかにワリ文化の特徴を示している。壁を建設する際に壁の基礎に墓を設置する特徴、土器を意図的に割って奉納する特徴、半地下式の石室なども、在地のカハマルカ文化ではなく、ワリ文化の特徴と合致する。一方で、出土土器の大部分は在地のカハマルカ文化のものであり、ワリ様式の土器片は少ないがあらゆる層、地区から出土し、また墓の副葬品としても完形品が確認されている。ワリ文化の遺跡内部は、アクセスがコントロールされ、それに平行するように、ワリの彩色土器を用いた儀礼は、かなり限定された人々のために行われた、排他的な性格を有していたと思われる。従って、ワリ様式の遺物の希少性から、在地の人々の主体性を強調することは論点がずれている。行政センターがある地域はワリ帝国の直接支配下にあったと考えるべきである。

「土壙墓からみえてくる先古典期マヤ南部地域の社会」

市川 彰(名古屋大学大学院・日本学術振興会特別研究員)

「土壙墓」は、最も簡素な墓壙構造をもつ墓である。石室墓などと比較して、その簡素な構造や副葬品の少なさゆえに、一般的には被支配層あるいは下位層の人々の墓として解釈されることが多い。古代マヤ社会は9割以上が被支配者層で構成され、その中身は決して均質なものではなかったと考えられている。しかし、マヤ地域における墓制研究の動向を概観してみると、石室墓など、いわゆる厚葬墓を対象にすることによって支配層の存在を浮かび上がらせる研究は比較的多いものの、土壙墓にみられる諸属性の類似・差異に着目し、古代マヤ社会の一側面にせまろうとする研究はほとんどみられない。被支配者層＝土壙墓の被葬者と仮定するならば、現在の研究状況において最も検出例の多い土壙墓の基礎的かつ実証的分析は古代マヤ社会の理解を深化させる上で重要な分析視点となりうる。

本発表では、発表者が主なフィールドとするマヤ南部地域の土壙墓を取り上げ、土壙墓の分析から古代マヤ社会の何にせまることができるのかについて基礎的検討をおこなう。

はじめに、先古典期マヤ南部地域出土の墓のうち約85%を占める土壙墓を取り上げ、その他の墓壙構造と比較することにより巨視的に土壙墓の諸特徴を捉え、それらが示すマヤ南部地域社会の実態について基礎的検討をおこなう。

次に、エルサルバドル共和国チャルチュアパ遺跡ラ・クチージャ地区で検出された先古典期後期の土壙墓群を例として、墓壙構造・規模、副葬品の種類、特殊行為(頭蓋変工など)の分析を通じて類型化し、各類型間の差異の析出およびその意味について考察する。

分析から得られた所見は以下の通りである。

1) 全体的な傾向として、マヤ南部地域の土壙墓は、その他の墓壙構造と比較すると先古典期を通じて最も副葬品の種類数が少なく、またヒスイ製品をはじめとする威信財の副葬率も低い。したがって、土壙墓の被葬者は社会の大部分を占める下位層の人々であったと考えられる。

- 2) しかし、その中でも石室墓などの厚葬墓同様に副葬品の種類数が多い例、複数の威信財を有している例、歯牙変工や頭蓋変工などの特殊行為が施されている例が看取できることから、下位層内における特殊な人物の存在、階層差や身分差の存在も推察される。
- 3) エルサルバドル共和国チャルチュアパ遺跡ラ・クチージャ地区の土壌墓群は、神殿ピラミッドや住居にともなわず「墓域」を形成している(図1)。
- 4) その墓域に埋葬された人々の墓は、墓壙構造・規模、副葬品の種類、特殊行為から少なくとも3つの異なる集団の存在を想定することができ、各集団にリーダー的人物が存在することも想定される。しかし、それらが家族集団を示すのかまたは職掌や階層に基づく集団を示すかなど、類型化された集団の詳細については今後の調査の進展をまつ必要がある。

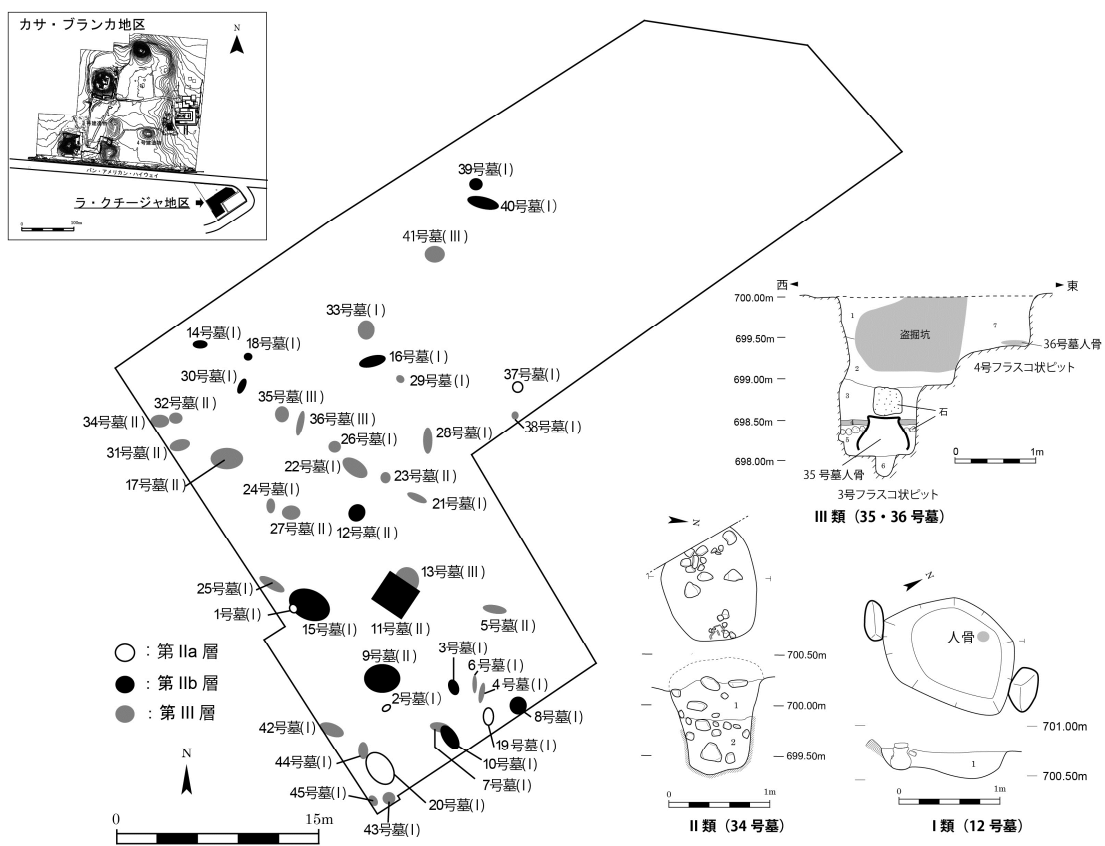


図1 エルサルバドル共和国チャルチュアパ遺跡ラ・クチージャ地区出土墓の出土位置
(発表者作成)